
ピカチュウがヒトカゲでヒトカゲがピカチュウ！？

将

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピカチュウがヒトカゲでヒトカゲがピカチュウ！？

【Nコード】

N5564V

【作者名】

将

【あらすじ】

一人称「オレ」。熱血少年で遊ぶのが大好きな「ヒトカゲ」と、一人称「ボク」。まじめな性格で遊ぶのも好きだが勉強も好きな「ピカチュウ」がある日突然、体が入れ替わっちゃった！？お互いに成りすましながら周囲にばれないように大奮闘！果たして二人は元に戻るのでしょうか？
ドタバタエンジストーリー、スタートです！！

悲劇の始まり（前書き）

この小説の原作者、将^{しょう}です。

なんとこの小説は他の作者さんの小説にはあまりなかった話です。

テーマは「ポケモン同士の体が入れ替わる」

実は僕、入れ替わりネタが大好きなんです！

前の小説より気楽に書けそうですし、アイディアがぼんぼん浮かんでくるんです！

ですからそちらを優先して書くことにしました。定期的に更新する可能性大です。

カッタ「でも僕の小説もたまには更新してよね！」

出てくるなクソ亀が~~~~~！！（怒）

カッタ「ぎゃあ~~~~~！！（ふつとばされて星になりました）」

実はカッタの小説がネタ切れだなんて言えない…（笑）

悲劇の始まり

ここは、ポケモンだけの世界。

そこで仲良く遊んでる二人（二匹？）のポケモンがいた。

???「ほらピカチュウ！オレを捕まえてごらん！」

???「待つてよヒトカゲくん！ボク転んじゃうよ！」

ピカチュウとヒトカゲだ。どうやら追いかけてっことをしているようだ。

しかし、二人は夢中になりすぎてるうちに「立入禁止」の看板があるところに入ってしまったのに気づかなかった。

ピカチュウ「ねえ、なんか変な森に入っちゃったみたいだよ。大丈夫かなあ？」

ヒトカゲ「大丈夫だよ！とにかく追いかけてこの続きやろうぜ！」

そう言って走ったとたんヒトカゲが足を滑らせた。

ヒトカゲ「うわっ！」

ピカチュウ「ヒトカゲくん!？」

ピカチュウはとっさに落ちそうになったヒトカゲの手をつかんだ。しかしピカチュウはヒトカゲの重さに耐え切れず一緒に坂を転げ落ちてしまった。

ヒトカゲ・ピカチュウ「うわ~~~~~!!!」

二人は意識を失った。その時だった。なぜか二人の体が突如光り始めた。

二人の魂が出てしまったのだ。そして、ヒトカゲの魂はピカチュウの体に、ピカチュウの魂はヒトカゲの体に入ってしまった。

五分後、二人は目を覚ます。

ヒトカゲ「うん。ヒトカゲくん大丈夫？」

ピカチュウ「うん。オレは大丈夫だ。ピカチュウも大丈夫か？」

ヒトカゲ「うんボクは大丈夫——」

二人は自分の顔を見合わせた。その瞬間、二人は驚いた。

ヒトカゲ・ピカチュウ「うわ~~~~~!!!」

ヒトカゲ「な、何でボクがもう一人いるの!？」

ピカチュウ「それはこっちのセリフだ!!!何でオレがもう一人...」

意味不明なことを言うピカチュウは自分の手を見た。

ピカチュウ「で、手が...。手が黄色くなってる~~~~~!!!」

ピカチュウは自分の体を確かめた。その後近くの川に自分の顔を映した。

ピカチュウ「この黄色い体、このギザギザの耳としっぽ、ほっぺの赤らみ…。間違いない。オレ、ピカチュウになっちゃった…!!」

ヒトカゲ「え？」

いやな予感がしたヒトカゲも川に自分の顔を映した。

ヒトカゲ「うわぁ~~~~!!ボク、ヒトカゲになっちゃってる~~~~!!」

ピカチュウ「オマエ…。まさかと思うが…。ピカチュウか？」

ヒトカゲ「うん。そうだよ。えっと…。もしかして君はヒトカゲくん？」

ピカチュウ「ああ。ってことはまさか…。」

ヒトカゲ「ボクたち…。」

ピカチュウ「心と体が…。」

ヒトカゲ・ピカチュウ「入れ替わったぁ~~~~!!?」

悲劇の始まり（後書き）

いかがでしたか！？

入れ替わった二人はこの後どうなるのでしょうか？

カッタ「僕の小説よりも面白そうなのはなんで？」

気のせいですよ。

それではまた次回！

カッタ「うまく逃げたな。」

オレがピカチュウでボクがヒトカゲで（前書き）

追いかけてここで遊んでいたピカチュウとヒトカゲだが、夢中になって立入禁止の森の中へ入ってしまった。

ヒトカゲは追いかけてこを続けようとして走ろうとしたとたん足を滑らせてしまう。

とっさにピカチュウはヒトカゲの腕をつかんだが重さに耐え切れず二人は坂を転げ落ちてしまう。

目覚めると二人の心と体が入れ替わっちゃった！？

第二話スタートです！！

オレがピカチュウでボクがヒトカゲで

ヒトカゲ（中身はピカチュウ）「ど、どうしよう…。ボクとヒトカゲくんが入れ替わっちゃったなんて…。」

ピカチュウ（中身はヒトカゲ）「ピカチュウ、もしかしたらこれは夢かもしれない。」

ヒトカゲ（ピカチュウ）「夢？」

ピカチュウ（ヒトカゲ）「ああ、そうだ。多分これは夢だ。互いのほっぺをつねれば目が覚めて現実に戻れる。なあピカチュウ、オレのほっぺをぎゅぐゅってつねってくれないか？オレもピカチュウのほっぺをつねるから。」

ヒトカゲ（ピカチュウ）「う、うん…。怖いけど、わかった。」

二人はたがいのほっぺをぎゅぐゅとつねった。

ヒトカゲ・ピカチュウ「いてててて（たたたた）！！」

ピカチュウ（ヒトカゲ）「ふう。痛かった。でもこれで元に…。戻ってねええええ！！」

ヒトカゲ（ピカチュウ）「やっぱりこれは夢じゃない。現実なんだ！！」

現実であると同時にヒトカゲ（ピカチュウ）は何かに気が付いた。

ヒトカゲ（ピカチュウ）「ねえ、ボクたちが入れ替わっちゃったってことは…。お互い技が使えなくなっちゃったってことだよね!？」

ピカチュウ（ヒトカゲ）「はっ!!そうか!!オレ電気タイプになっちゃったから炎技が使えないじゃん!!ピカチュウ、どうやって電気技使うんだ?」

ヒトカゲ（ピカチュウ）「ボクも炎タイプになったから10万ボルトや雷が使えない!!ヒトカゲくん、こっちも聞くけどどうやって炎技使うの?」

ピカチュウ（ヒトカゲ）「力いっぱい吹けばひのこが使えるかも…。」

ヒトカゲ（ピカチュウ）「電気技は、えっと…。ほつぺに電気がたまったら力を入れて、電気ショック!!だっけ?今まで無意識に電気技使ってたからよくわからない…。」

ピカチュウ（ヒトカゲ）「オレも…。それより父ちゃんや母ちゃんにどう説明したらいいんだ?」

ヒトカゲ（ピカチュウ）「そうだよね…。ボク、父さんと母さんのほかに弟のピチューがいるんだけど…。信じてもらえるかなあ…。」

ピカチュウ（ヒトカゲ）「やっぱお互いになりすますしかないのか…?」

ヒトカゲ（ピカチュウ）「そうだね…。なりすますしかないよね…。」

ピカチュウ（ヒトカゲ）「練習してみるか？二人で。」

ヒトカゲ（ピカチュウ）「やってみる？」

ピカチュウ（ヒトカゲ）「やってみるか！じゃあピカチュウはオレのまねをして、オレはピカチュウのまねをする。ちよつとテストだ。」

ヒトカゲ（ピカチュウ）「じゃあボクからね。え、えつと…。ぼ、じゃなくてオレはヒトカゲ。ピ、ピカチュウ。あ、遊ぼう…。ぜ…。」

ピカチュウ（ヒトカゲ）「あ、ああ、じゃなくてう、うんいいよ！ヒトカゲ…くん…。」

ヒトカゲ（ピカチュウ）「あ~~~~！！やっぱりオレって言うの恥ずかしい~~~~！！」

ピカチュウ（ヒトカゲ）「あきらめるな！！それだとすぐばれるぞ！頑張ろうぜ！」

ヒトカゲ（ピカチュウ）「う…うん！！」

完璧^{かんぺき}にお互いのふりが出来るようになったのは、夕方だった…。
帰る時間になった。

ピカチュウ（ヒトカゲ）「おつと、帰る時間だ。じゃあなピカチュウ。家にいる時はちゃんとオレのふりをしてるよ。くれぐれも「ボク」とかしゃべり方にも気を付けろよ。」

ヒトカゲ（ピカチュウ）「わかってるよ！！ヒトカゲくんもがんば

ってボクになりすましてね！」

ピカチュウ（ヒトカゲ）「ああ!!！」

こうして二人はお互いの家へ…。

オレがピカチュウでボクがヒトカゲで（後書き）

入れ替わった二人はそれぞれの家へ！！

うまくなりすませるのでしょうか！？

次回へ続きます！！

お互いになりませー！ピカチュウの家編（前書き）

ピカチュウ（ヒトカゲ）やヒトカゲ（ピカチュウ）はちょっと長いので

ピカチュウ（ヒト）とヒトカゲ（ピカ）に略します。

今回は中身ヒトカゲのピカチュウがピカチュウの家に行きます。
果たしてどうなるのでしょうか？

第三話スタートです！！

お互いになりませー！ピカチュウの家編

ピカチュウ（ヒト）「はあ…、ピカチュウの家には一度遊びに行つたことあるから道はわかるけどしばらくピカチュウの家で暮らさなくちゃいけないのか…。とにかくばれないようにしなくちゃな！」

そう言ってるうちにピカチュウ（ヒト）はピカチュウの家に着いた。

ピカチュウ（ヒト）「ただいまー！」

ピチュー「お帰りお兄ちゃん！」

ライチュウママ（以下ライママ）「お帰りなさい。あら、泥だらけじゃない。すぐシャワー浴びたほうがいいわよ。」

泥だらけなのはさっき入れ替わる前に坂を転げ落ちたからである。

ピカチュウ（ヒト）「はい。」

そう言つて、風呂場に向かった。

シャワーを浴びてから五分後――。

ピカチュウ（ヒト）（あいつの風呂場、オレの風呂場より広かった…。ちよつと悔しいな…。）

シャワーを浴び終えたピカチュウ（ヒト）はそう思いながら暇つぶしをしようとピカチュウの部屋に向かった。

ピカチュウ（ヒト）「あいつの本でも読んでみるか…。」

ピカチュウの部屋の本棚には小説と漫画と勉強ドリルなどがバランスよく並んでいた。

その中にはベストセラー本などもあった。その中からブックランキング4週連続1位のミリオンセラー漫画「ゼニガメ冒険記」を選んだ。

ピカチュウ（ヒト）「おっ！「ゼニガメ冒険記」じゃん！あいつこんな人気漫画どこで手に入れたんだ？オレも欲しかったけど、この書店でも売り切れだったからな…。苦勞して手に入れたんだな。ピカチュウには悪いけど読んじゃおう」

その後、ピカチュウ（ヒト）はそれを読みほのぼののシーンでは笑いっぱなしだった。

夢中になってから1時間後、誰かが来た。

ライチュウパパ（以下ライパパ）「ただいま〜！」

ライママ「お帰りなさい。今日も研究お疲れ様。」

研究所で働いているピカチュウのお父さん、ライパパ。

ピカチュウ（ヒト）「おっ、お帰りなさい〜！」

ピチュー「お帰りパパ〜！」

ライパパ「ただいま。二人とも元気だな〜！」

ライママ「ご飯できてるから四人で食べましょう。」

三人「はい！」

ピカチュウ（ヒト）はご飯が自分の家よりちょっと豪華だった。

ピカチュウ（ヒト）（うわぁ…。ハンバーグだ…。うちでは二月に一回しか出ないのに…。）

ピカチュウ（ヒト）は驚きながらも喜んだ。

ライママ「ではいただきます。」

三人「いただきます。」

ライママ「そういえば今日はヒトカゲくんと何して遊んだの？」

ピカチュウ（ヒト）「追いかけてたよ。すごく楽しかった！」

ライママ「それで汚れてたのね。」

ピカチュウ（ヒト）「うん。」

しばらく話しながら、ピカチュウ（ヒト）は食事を終えた。ヒトカゲ（ピカ）との練習のおかげか、うまくピカチュウになりすませていた。

そして、食事を終えた後、風呂に入り、歯磨きし、寝るのだった。

ピカチュウ（ヒト）「お休み。父さん、母さん」

ライパパ・ライママ「お休み。」

そしてピカチュウ（ヒト）はベッドでふと思った。

ピカチュウ（ヒト）（とりあえずうまくなりすませてよかった。そういえばオレの体のピカチュウは今どうしてるんだろう…。うまくいってるかな…。大丈夫かな…。）

そう思いながらピカチュウ（ヒト）は眠りについた。

お互いになりませー！ピカチュウの家編（後書き）

劇中にでてきた「ゼニガメ冒険記」は某女の子に間違われる男の子が出てくる小説のタイトルを少し変えたものです。

あ、それを書いてる作者さんには許可を取ったので安心してくださいね。

次回は中身ピカチュウのヒトカゲがヒトカゲの家へ。

ヒトカゲは無事になりませましたがピカチュウは…！？

次回へ続きます！！

お互いになりませー！ヒトカゲの家編（前書き）

今回は中身ピカチュウのヒトカゲがヒトカゲの家に行きます。

中身ヒトカゲのピカチュウはうまくいきましたが果たして逆は…？

それでは第四話スタートです！！

お互いになりませー！ヒトカゲの家編

ヒトカゲ（ピカ）「ヒトカゲくんの家の道はわかってる。一度遊びに行ったことあるからね。しばらくはヒトカゲくんの家か…。でもちよつと面白そう」

先ほどのピカチュウ（ヒト）と同じことを考えているが、ピカチュウ（ヒト）とは逆にわくわくしている。そしてヒトカゲの家に着いた

ヒトカゲ（ピカ）（頑張つてヒトカゲくんになりきらないと…）「ただいまー！」

リザードンママ（以下リザママ）「お帰りなさい。あらやだ真つ黒！すぐシャワー浴びてきなさい！」

真つ黒なのは前回の話を見ればわかります。

ヒトカゲ（ピカ）「は、はいっ！！」

ヒトカゲ（ピカ）はヒトカゲっぽくなるべく強気に返事をした。

そしてシャワーを浴びてから五分後、ヒトカゲ（ピカ）はリザママに驚きの言葉を発した。

ヒトカゲ（ピカ）「母さ…じゃなくて母ちゃん。オレなんか今日は勉強したい気分なんだ。だからちよつと部屋で勉強してるね。」

リザママ「ま、まあっ！！ヒトカゲが勉強を！！雨でも降るんじゃないかしら。」

ヒトカゲ（ピカ）「失礼な（怒）オレだつてたまにはそういう気分になることだってあるさ。」

ヒトカゲ（ピカ）はなるべくヒトカゲっぽい態度で接した。

リザママ「でも母ちゃん嬉しいわ♪自分から“勉強したい”って言う日が来るなんて…。感激よ！！じゃ、勉強頑張つてね♪」

ヒトカゲ（ピカ）「ああ！！」

ちなみにこの世界には学校はなく、勉強をするしないは自由。しかし、すればするほど“いい大人”への階段を上っていくのだ。ピカチュウはいい大人になりたいので、たとえヒトカゲの体でも勉強をせずにはいられないのだ。

ヒトカゲ（ピカ）は勉強を始めた。しかし読者の皆さん！！一生懸命勉強をしているのでくれぐれも邪魔にならないようここは勉強が終わるまで待ちましょう！！

——1時間後——

リザードンパパ（以下リザパパ）「ただいま。」

リザママ「おかえり父ちゃん。今日もうまく焼けたかい？」

リザパパ「ああ、もちろん！！」

リザパパはレストランの調理場で働いてるのだ。

ヒトカゲ（ピカ）「おかえり父ちゃん！！」

リザパパ「ただいま。ご飯は出来てるか？」

リザママ「もちろん！食べましょう」

リザママのご飯は和風なものが多かった。

ヒトカゲ（ピカ）（肉じゃが、味噌汁、おひたしか……。じゃがいもほうれん草も好きだから嬉しいな）

ピカチュウはヒトカゲと好みの食べ物が違うのだ。性格も優しい。人間界で言う“草食系男子”ってところだろう。

リザママ「では、いただきます。」

リザパパ「いただきます！」

ヒトカゲ（ピカ）「いっ…、いただきます！」

ヒトカゲ（ピカ）は肉じゃがを食べた瞬間固まった。そして――。

ヒトカゲ（ピカ）（おっ…、おいしい！！うちで食べる肉じゃがとは違う！！なんか、ほっぺが落ちそうだ！！）

そういった後、リザママに

ヒトカゲ（ピカ）「すごくおいしいよ母ちゃん！！」

リザママ「そう？いつも食べてるじゃない！フツ。」

ヒトカゲ（ピカ）は自分の家とは違うおいしさに驚きながらも嬉し

そうに食べた。

おいしい食事を終えたヒトカゲ（ピカ）は風呂に入りながら思った。

ヒトカゲ（ピカ）（ヒトカゲくんとの練習のおかげでうまくヒトカゲくんになりすませてよかった！でもヒトカゲくんの方は大丈夫かなあ？うまくいつてるのかなあ…？）

そう思いつつヒトカゲ（ピカ）は、風呂から上がり、歯磨きして、眠りにつくのだった。

お互いになりませー！ヒトカゲの家編（後書き）

どちらもうまくいったみたいですね！！

今回は違う体に慣れるためにピカチュウ（ヒト）は電気技を、ヒトカゲ（ピカ）は炎技をお互いに教わります。

しかし！！作者は明日から箱根一泊旅行に行くので次回は8月12日（金）に更新予定です！！

それでは次回をお楽しみに！！

技特訓！（前書き）

前回、ピカチュウとヒトカゲはどちらもお互いになりすますことに成功し、眠りについた。そして翌日――。

技特訓！

朝、ピカチュウの家――。

ピカチュウ（ヒト）「うゝん、朝か…。あつ！」

ピカチュウ（ヒト）は昨日のことを思い出しながら鏡を見た。

ピカチュウ（ヒト）「も、戻ってねえゝゝゝゝ！！！」

一方その頃、ヒトカゲの家では――。

ヒトカゲ（ピカ）「ふあゝゝ。朝だ…。はっ！」

同じくヒトカゲ（ピカ）も鏡を見た。

ヒトカゲ（ピカ）「やっぱり…。戻ってないゝゝゝゝ！！！」

二人は朝の支度を全部済まし、出かけた。もちろん、“自分の体に会うために”。

二人は広場で会う約束をし、同時に着いた。

ヒトカゲ（ピカ）「お、おはようヒトカゲくん！」

ピカチュウ（ヒト）「よっ！ピカチュウ！昨日はばれずに済んだか？」

ヒトカゲ（ピカ）「うん！で、そっちは？」

ピカチュウ（ヒト）「こっちも大丈夫だったぜ！」

ヒトカゲ（ピカ）「そう。良かった！でも、これからどうしよう…。」

ピカチュウ（ヒト）「とりあえず、今はお互い別の体になったから技が使えなくなった。ということは…。別の体に慣れるためにオレは電気技、ピカチュウは炎技の特訓をしようと思うんだけどどうだ？」

ヒトカゲ（ピカ）「うん！そうしよう。」

こうして、特訓が始まった。

ピカチュウ（ヒト）「まずは、オレが炎技を教える。ひのこのやり方だ。」

ヒトカゲ（ピカ）「う…うん。」

ピカチュウ（ヒト）「大きく息を吸って…。力を込めて吐く…！」

ヒトカゲ（ピカ）「わかった…！すう…、はあ…！」

しかし、うまくいかなかった。

ピカチュウ（ヒト）「だめか…。ん！？そうか…！もしかしたら…！」

ピカチュウ（ヒト）「何か名案が思いついた。」

ピカチュウ（ヒト）「ほらピカチュウ！！犬猿の仲のナエトルの写真だ！！この写真に向かって、ひのこを吐くんだ！！」

ヒトカゲ（ピカ）「え？な、ナエトル…！？」

ヒトカゲ（ピカ）は何かがプチンと切れた。

ヒトカゲ（ピカ）「うお~~~~~！！クソ亀え~~~~~！！これでも食らえ~~~~~！！ひのこお~~~~~！！」

ヒトカゲ（ピカ）は見事にひのこが成功し、ナエトルの写真は灰になった。

実は、ピカチュウはナエトルと犬猿の仲。いつもは優しいピカチュウがナエトルと出会うと、プチンと何かが切れ、怒り狂う。つまり、ピカチュウは二重人格だったのだ！！

ヒトカゲ（ピカ）「はあ…はあ…。あれ？ヒトカゲくん、ボクは何を…。」

ピカチュウ（ヒト）「やったなピカチュウ！！ひのこが成功したぞ！！」

ヒトカゲ（ピカ）「本当！？やったあ~~~~~！！わ~~~~い！！」

ピカチュウ（ヒト）「じゃ次はオレがピカチュウに教わる番だな。」

ヒトカゲ（ピカ）「あ、はい！じゃ、電気ショックのやり方を教えるね。まずは、力を込めて、ほっぺに電気をためるんだ。そして、力いっぱいそれを出すんだ。」

ピカチュウ（ヒト）「よし！力を込めて…、あ、なんかびりびりきた！」

ヒトカゲ（ピカ）「頑張って！」

ピカチュウ（ヒト）「…今だ！」

ピカチュウ（ヒト）は力いっぱい電気をため、発射した。

ヒトカゲ（ピカ）「やった！！成功だ！！」

ピカチュウ（ヒト）「ああ！！このびりびりした感じ、ヒトカゲの時にはなかったぜ！！ピカチュウの体ってすげえや！！」

ヒトカゲ（ピカ）「ううん。ヒトカゲくんの体もすごいと思うよ。だって、炎がついたしっぽってかっこいいんだもん！！実は入れ替わる前からうらやましいなって思ってた！！まさか、夢が叶うなんて思わなかったよ！！」

ピカチュウ（ヒト）「いやいや、ピカチュウのギザギザのしっぽもかっこいいと思うぜ！！オレも実は、うらやましかったんだ…。」

ヒトカゲ（ピカ）「しばらくは元に戻れないと思うから、今はヒトカゲくんの体を楽しもうかな」ボクの体で出来なくてヒトカゲくんの体で出来ること、やってみたいし」それにこんな体験、めったに出来ないよ！！」

ピカチュウ（ヒト）「確かに他人の体になるってめったに無いことだよな。よし！オレもピカチュウの体を楽しもうかな。ピカチュウにしか出来ないこと、やってみるか！！」

二人は、お互いの体を楽しむことにした。

技特訓！（後書き）

三日ぶりの更新です！！

ということ、少し長めの文章にしました。

次回はなんと！！新キャラ登場予定！！お楽しみに！！

ゼニガメの秘密（前書き）

今回から新キャラ、ゼニガメが登場します。

見た目は普通のゼニガメですが、実はとんでもない秘密が…。

注目の第6話スタートです！！

ゼニガメの秘密

しばらくお互いの体を楽しむことにしたヒトカゲとピカチュウ。入れ替わってから1週間たったある日のことだった。

ヒトカゲ（ピカ）「あー！誰か倒れてるー！」

ピカチュウ（ヒト）「助けようぜー！」

ヒトカゲ（ピカ）「うんー！」

倒れていたのはゼニガメだった。容姿からして♂のようだ。

ゼニガメ「う、うーん。」

ピカチュウ（ヒト）「あ、気がついた。」

ヒトカゲ（ピカ）「大丈夫…か？」

ゼニガメ「あ…。すみません。助けてくれてありがとうございます。おなかがすいて倒れてて…。」

ヒトカゲ（ピカ）「おなかがすいてるのか…。ちょっと待ってる！」

ヒトカゲ（ピカ）はヒトカゲのふりをして、木の実を取りに行った。

ゼニガメは木の実を食べながら話す。

ゼニガメ「ありがとうございます。ワタシ死ぬかと思いました。」

ピカチュウ（ヒト）「え？ワタシ？」

ヒトカゲ（ピカ）「お前…。男？だよな？見た目と声的に」

ゼニガメ「はっ！しまった！っ！ついいつもの口調でしゃべっちゃった！今は「ボク」なのに…。」

ピカチュウ（ヒト）「もしかして…、何かあったの？信じるからボクたちに話してみてよ。」

ゼニガメ「えっ…？本当に信じてくれるんですか？」

ヒトカゲ（ピカ）「ああ！（実際ボクたち、体が入れ替わってるっていうありえないことが起きてるし…。）」

ゼニガメ「じゃあ話します。ワタシは見た目と声は男なんですけど中身は女なんです。」

ヒトカゲ・ピカチュウ「えっ！？」

ゼニガメ「実は元々の体はゼニガメじゃないんです。ワタシの元々の体は…。♀のフシギダネなんです。」

ピカチュウ（ヒト）「え？それってどういう…。」

ゼニガメ「ワタシはこの体の元の持ち主のゼニガメくんとおいしい木の实を探そうとして立入禁止と書かれた森へ入ったんです。ワタシは止めたんですけど、ゼニガメくんが「おいしい木の实を探すためならどんなところでも入るんだよ！！」と言ったので仕方なく入

ったんです。そして木の実を探してる途中でゼニガメくんがあわてすぎて足を滑らせたんです。ワタシは助けようと腕をつかんだんですが一緒に転げ落ちてしまったんです。そして、気がついたら……ワタシとゼニガメくんの体が入れ替わっていたんです。信じられない話かもしれませんが……。信じてくれますか？」

ヒトカゲ（ピカ）「嘘……。」

ピカチュウ（ヒト）「信じるものにも、オレたちも入れ替わってるんだ。」

ゼニガメ「えっ？」

ピカチュウ（ヒト）「オレ、今はピカチュウの体だけど元々の体はそっちにいるヒトカゲなんだ。」

ヒトカゲ（ピカ）「で、ボクは今はヒトカゲの体だけど中身はピカチュウなんだ。」

ゼニガメ「まさかワタシのほかにも入れ替わったポケモンがいたなんて……。」

ピカチュウ（ヒト）「こっちも驚いたよ。」

ヒトカゲ（ピカ）「ねえ、確かボクたちも森の中で入れ替わっちゃったんだよね？もしかして同じところじゃ……？」

ピカチュウ（ヒト）「そうかもしれないな。オレたち追いかけてここに夢中になりすぎて「立入禁止」の看板を見てなかったのかもしれないな。」

ヒトカゲ（ピカ）「ねえ、フシギダネちゃんの体になったぜニガメくんは？」

ゼニガメ「今はワタシになりきって普通に暮らしてます。」

ピカチュウ（ヒト）「なあ、会ってもいいか？」

ゼニガメ「全然いいですよ。むしろ大歓迎です。入れ替わってしまった者同士何かお話できるといいですね。」

3人はフシギダネの家に遊びに行くことになった。

ゼニガメの秘密（後書き）

ピカチュウ（ヒト）「まさかゼニガメも入れ替わってたとは…。」

ヒトカゲ（ピカ）「中身は♀のフシギダネなんだね。」

皆さんは気づいてるかもしれませんがピカチュウ、ヒトカゲ、ゼニガメ、フシギダネ…。そう！！実はポケモン初期の赤緑の主役級ポケモンを全員使ってるんです！！

ピカチュウ（ヒト）「赤緑ファン、もしくはファイアレッド、リーフグリーンファンには嬉しいことだな。」

さて、次回はなんと…。

「ピカヒト」の番外編がスタートします！！

ピカチュウとヒトカゲが入れ替わる前のエピソードやキャラ紹介をメインに更新予定！！

なので次回の更新は番外編を少し作ってからの更新となります！！ちなみにいつかは未定。

ピカチュウ（ヒト）「それまでにアイデア作つとけよ。」

はーい。ではまた次回！！

フシギダネの家（前書き）

六日ぶりの更新です。

文章が前回より少ないです…。1292文字しかありませんが読んでくださいm(_____)m

前回は入れ替わってたポケモンがもう一組いたことが判明！！

ヒトカゲとピカチュウは中身ゼニガメのフシギダネに会いにフシギダネの家に行くことに…。

それでは第七話スタートです！！

フシギダネの家

中身フシギダネのゼニガメに案内してもらい、フシギダネの家に着いた。

ゼニガメ（中身フシギダネ）「ゼニ…じゃなかった。フシギダネちゃ〜ん!」

フシギダネ（中身ゼニガメ）「あ、あら。ゼニガメくん…。いらっしやい。そちらの二人は？」

ゼニガメ（フシ）「あ、ああ。ヒトカゲとピカチュウだ。今日は両親はいるか？」

フシギダネ（ゼニ）「ううん。今日は出かけてる。」

ゼニガメ（フシ）「良かった…。じゃあいつもの口調に戻すわね。」

フシギダネ（ゼニ）「え？な、何で！？ばれるよ!？」

ゼニガメ（フシ）「あ、心配しないで。そこにいるヒトカゲくんとピカチュウくんも体が入れ替わってるから。」

フシギダネ（ゼニ）「え…？本当か？」

ヒトカゲ（ピカ）「はい。ボクは見た目はヒトカゲなんですが中身はピカチュウなんです。」

ピカチュウ（ヒト）「ああ。オレは見た目はピカチュウだが、中身

はヒトカゲなんだ。」

フシギダネ（ゼニ）「そうなのか…。じゃあオレも口調を戻すか。オレはゼニガメ。♂だ。今は♀の体になってるけどな。」

ヒトカゲ（ピカ）「うわ。声とギャップだ。」

ピカチュウ（ヒト）（その声でそのしゃべり方はちょっと気持ち悪いな…。）

フシギダネ（ゼニ）「さっきゼニガメから聞いたかもしれないがもう一度話す。オレとフシギダネはおやつの木の実を探そうとしてたんだ。そこで、立入禁止と書かれている森を見つけたんだ。立入禁止と書かれているのは、珍しい木の実があるんじゃないかと思ったんだ。フシギダネが止めたんだけどオレは振り切って森の中へ入ったんだ。そして木の実を探してる途中にオレが足を滑らせちゃったんだ。フシギダネがとっさにつかんでくれたんだけど、重さのせいか、一緒に転げ落ちちゃったんだ。で、気がついたら体が入れ替わってたって訳。」

ピカチュウ（ヒト）「オレたちと似てるな…。オレとピカチュウは追いかけてここをして森に入ってたんだ。オレが足を滑らせてピカチュウがつかんでくれたんだけど一緒に転げ落ちて入れ替わっちゃったんだ。」

フシギダネ（ゼニ）「入れ替わり方はオレたちと同じだな。」

ゼニガメ（フシ）「それで、今はどうしてるの？」

ピカチュウ（ヒト）「今はお互いの体を楽しむことにしたんだ。こ

んな体験はめったに出来ないからな。技も練習してできるようにな
ったんだぜ！」

フシギダネ（ゼニ）「わ、技かあ…。」

ゼニガメ（フシ）「ワタシたちは戦いを好まない主義だから…。あ
んまりバトルとかしないんだよね…。あ！ちよつと話しすぎちゃ
ったね。良かったらおやつ食べません？うちの両親^{フシギバナ}は木の実のお菓
子売ってるお店で働いてるから良くもらうんだ。」

フシギダネ（ゼニ）「アイツの家のお菓子はとってもうまいんだぜ
！！」

ヒトカゲ（ピカ）「そう？じゃあごちそうになるっかな」

ピカチュウ（ヒト）「仕方ねえなあ…。」

???・???・???・???「フシギダネちゃん！！いる？」

フシギダネ（ゼニ）「あ、三馬鹿^{ばか}だ。くそ…。タイミング悪いと
きにきやがった！…あいつら空気読めや！…」

ヒトカゲ（ピカ）「三馬鹿って？」

フシギダネ（ゼニ）「あ、後で紹介するよ。」

フシギダネの家（後書き）

ピカチュウ（ヒト）「終わり方中途半端!!」

ごめんね。今日は変にやる気が出なくて。

そして土曜と日曜はお出かけするのでまたお休みさせていただきま
す。

さらに来週の火曜日には学校が再開するので大幅に更新が遅れる可
能性があります。

ヒトカゲ（ピカ）「三馬鹿って誰？気になる〜!!」

それは次回で明らかになります!! 第八話は早ければ月曜に更新予
定です!!
では!!

ヒトカゲ・ピカチュウ「またな（ね）!!」

三馬鹿登場！

????・????・????「お邪魔しますー!!」

フシギダネ（ゼニ）「い…いらっしやい…。」

フシギダネ（ゼニ）はとっさに口調を変えた。
入ってきたのは、ヒノアラシ、チコリータ、ミズゴロウ。

ヒノアラシ「ねえ、その子たちだ〜れ？」

フシギダネ（ゼニ）「あ、紹介するわね。ヒトカゲちゃんとピカチュウくん。あ、二人にも紹介ね。ヒノアラシの“ヒー”くん、チコリータの“チー”ちゃん、ミズゴロウの“ミー”くんよ。」

ヒトカゲ（ピカ）「あ、はじめまして。ボ…じゃなくてオレはヒトカゲ。よろしくな。」

ピカチュウ（ヒト）「ボクはピカチュウです。よ…よろしくね！敬語って難しいな…。」

ヒー（ヒノアラシ）「はじめまして。オイラはヒノアラシの“ヒー”。よろしくな。」

チー（チコリータ）「はじめまして。アタシはチコリータの“チー”。よろしく！ヒトちゃん、ピカちゃん。」

ヒトカゲ・ピカチュウ（ヒトちゃん、ピカちゃん…？）

ミー（ミズゴロウ）「ふわぁぁ。ボクはミズゴロウの“ミー”っていうんだ…。眠…。よろしく…ね…zzz」

チー「あゝあ。ミーったらまた寝るんだから。ちよつと寝室まで移動させてくる。」

そう言いながら三人は寝室へ…。

フシギダネ（ゼニ）「（小声）ふう。やっといつもの口調に戻せる。実はあの三人が三馬鹿って呼ばれてるのはあいつらが本当に馬鹿だからだ。」

ヒトカゲ（ピカ）「どつという馬鹿なの？」

フシギダネ（ゼニ）「まず“ヒー”。あいつはかわいい女の子を見るとすぐナンパするやつなんだ。あいつのナンパ癖はすごいよ。振られても振られてもナンパしてくるんだ。次は“チー”。こいつはヒーとは逆にイケメンを見つけるとナンパするやつなんだ。そして料理がド下手！！カレーにイチゴ大福入れたりハンバーグにジャム唐辛子、キムチとかを入れたりするんだぜ。」

ピカチュウ（ヒト）「うわ。想像しただけでもまずそう。」

ヒトカゲ（ピカ）「食べたら絶対病院行きだね。」

フシギダネ（ゼニ）「最後は“ミー”。あいつは超マイペースで間抜け！！すぐ寝ちゃうし待ち合わせとかには必ず遅刻するやつなんだぜ！！」

ピカチュウ（ヒト）「まあ現にこつやつて寝てるしな。」

ヒトカゲ（ピカ）「なるほどね。だから“三馬鹿”って呼ばれてるんだね。」

フシギダネ（ゼニ）「そういうこと。」

ゼニガメ（フシ）「みんなお待ち〜！！木の実のクッキー焼けたわよ！！」

ゼニガメ（フシ）はこのクッキーをずっと作ってたらしい。

フシギダネ（ゼニ）「おっ！！うまそう〜！！」

ヒトカゲ（ピカ）「うわ〜！！本当においしそうだね！！」

ピカチュウ（ヒト）「じゃ、いただきますか。」

四人「いただきます〜す〜！！」

と、食べようとしたそのとき――。

ヒー「なにになに！？クッキー！？」

チー「おいしそう！！食べていいの？」

ミー「クッキー、クッキー！！」

→おいで目が覚めた。

フシギダネ（ゼニ）（だから、お前ら空気読めよ…）。

結局断ることも出来ず三人はお構いなくみんなと一緒にクッキーを食べわずか一分で無くなったそうです。

さらに。

ピカチュウ（ヒト）「あっ！！帰る時間だ！！」

ヒトカゲ（ピカ）「なあ、また来ていいか？」

フシギダネ（ゼニ）「も、もちろん！！」

三馬鹿「え〜〜！！」

笑。てい。と。か。

こうして二人は帰った。

ヒー「ねえ、今日は泊まっていたい？」

チー「アタシたち今日泊まるしたくして来ちゃったの」

ミー「ねえ〜〜、いい〜〜？」↑何かを訴えるまなざし攻撃。目がキラキラ。

フシギダネ（ゼニ）（う…っ、こんな目で見つめるな…。）「わかったわよ！！」

三馬鹿「イエーイ！！」

ゼニガメ（フシ）「あ、オレ…も帰るから。じゃあな。（頑張つて
ねゼニガメくん…。）」

フシギダネ（ゼニ）（くっそ～～！！今日は三馬鹿と寝るのかよ…。
誰か助けてくれ～～～～！！）

三馬鹿登場！（後書き）

三馬鹿の種族は当時僕がやっていた金・クリスタル・サファイアで使ったポケモンを選びました！！

ヒー「よろしくー！！」

チー「よろしくね」 ↑ 投げキッス

ミー「よろしくー。ー。ー。ー。」

さて、明日から学校が再開しますので次はいつ更新するかは未定です。

次は番外編で三馬鹿のキャラ紹介とエピソードなどをやっちゃう予定です。

では！！

ヒトカゲの複雑な恋（前書き）

1週間更新されなくてごめんなさい！！作者は学校が始まったので執筆できない状況でした！！

ピカチュウ（ヒト）「それ番外編でも言っただよな？」

はい。でも今回から新展開です！！今日はヒトカゲ（中身）の初恋についてのお話です。

ヒトカゲ（ピカ）「えっ！？ちょっと楽しみだな。」↑ニヤニヤ

ピカチュウ（ヒト）「／／／／ピカチュウ！！（怒）」

ヒトカゲ（ピカ）「あっ！ごめんごめん。」

そんなわけで文章は短めですが久々の本編第九話スタートです！！

ヒトカゲの複雑な恋

ヒトカゲとピカチュウが入れ替わってから2週間がたった。

そんなある日のこと、体がピカチュウのヒトカゲは一人で散歩に出ていた。

ちなみに体がヒトカゲのピカチュウはヒトカゲの家族と買い物に出かけている。

一人が暇なので散歩に出ることにしたのだ。

そんな時、ピカチュウ（ヒト）は誰かにぶつかった。

???「きゃっ!」

ピカチュウ（ヒト）「あ…。すみません!!ごめんなさい!!あの…、大丈夫ですか?」

ピカチュウの体にだいぶん慣れてきたのかヒトカゲはピカチュウの口調をスムーズにしゃべっている。

???「はい…。大丈夫です。ワタシの方こそ前方不注意でしたので…。すみません。」

ぶつかったポケモンは丁寧に謝る。

???「あ、自己紹介がまだでしたね。ワタシはアチャモのアツミといいます。よろしく願います。」

ピカチュウ（ヒト）「アツミちゃんか…。かわいい名前だね。ボクはヒ…じゃなくてピカチュウです。よろしくね。」

まるで本物のピカチュウのように丁寧に挨拶をするヒトカゲ。

アツミ「ピカチュウくんか…。覚えておくね。じゃ、ワタシは友達と待ち合わせしてるから！！じゃあね。」

ピカチュウ（ヒト）「あ…うん。じゃあね。」

ヒトカゲはアチャモのアツミと別れた。

そのとき、ヒトカゲは何か熱いものを感じた。

ピカチュウ（ヒト）（何だろう…この暖かい気持ちは…。これってまさか…。 “恋”なのか…？中身は同じ炎タイプだけど…。今オレはピカチュウの体だから…。くそ…。オレがヒトカゲのままだったらこんなことには…。どうしたら…どうしたらいいんだ…。）

ヒトカゲは少しのときめきを感じながらも複雑な表情だった。しかし、顔は赤かった。

ヒトカゲの複雑な恋（後書き）

ピカチュウ（ヒト）「くそおっ…！」

まだ悩んでおります。

そんなわけで今回から新キャラのアチャモ、アツミちゃんが登場です…！

アツミ「みなさんはじめまして♪これからよろしくお願いします♪」

ヒトカゲ（ピカ）「まさか恋の展開になるとはね…。」

一度やってみたかったんだよねえ…！↑ニヤニヤ

ピカチュウ（ヒト）「作者？（怒）」

いいじゃん。別に。

ピカチュウ（ヒト）「良くない…！待て…！…！」

ぎゃあああ…！とにかく次回に続きます…！では…！↑全力疾走する作者

ピカチュウの作戦（前書き）

お待たせしました！！大変長らくお待たせしました！！ようやく記念すべき十話が更新されました！！

ピカチュウ（ヒト）「。。。。さ〜ん！！ハリセン貸してください！！この作者制裁したいんです！！」

ちよ、他の作者さんのアイテムを使うな！！（あえて名前を伏せるww）

今回は超グダグダです！！この小説が始まって以来のグダグダじゃないでしょうか？（笑）

ヒトカゲ（ピカ）「笑ってすむことじゃないでしょ…。」

それでは、記念すべき第十話スタートです！！

ピカチュウの作戦

体がピカチュウのヒトカゲはアツミという名前のアチャモに恋をした！！

しかし、中身はヒトカゲでも、体はピカチュウ…。この恋、どうなる！？

——翌日

ピカチュウに話すか話さないか迷っていたヒトカゲだが、親友に嘘はつけないので、昨日のことを話すことにした。そして、話した後、ピカチュウはびっくりしながらこう言った。

ヒトカゲ（ピカ）「ええっ！！！？恋！？」

ピカチュウ（ヒト）「ああ…。相手はアチャモで名前はアツミ。昨日オマエが出かけてるとき、オレは暇だったから散歩に出てたんだ。そしたら、ポケモンにぶつかっちゃって…。それがアツミだったんだ。」

ヒトカゲ（ピカ）「それで、どうしたの？」

ピカチュウ（ヒト）「オマエの体だったから仕方なくオマエになりきりながら話したんだ。でも、話してるうちになんか熱くなっちゃって…。それでわかった。オレはアイツに恋をしていることを。」

ヒトカゲ（ピカ）「そうだったんだ…。でも大丈夫なの？今はボクの体だし…。」

ピカチュウ（ヒト）「それが問題なんだよ……。どうすればいいのかわからない……。はあ……。」

ヒトカゲはため息をついた。

ヒトカゲ（ピカ）「だったらさ！ー！ボクにもアツミちゃんって子に会わせてよ！ー！ボクがアツミちゃんと友達になれば元に戻った後、告白しやすくていいんじゃない？」

ピカチュウ（ヒト）「なるほど。じゃあそうするか。」

二人は家を出て、アツミを探すためヒトカゲが昨日来た場所の近くに行ってみた。

ピカチュウ（ヒト）「おーい！ー！アツミちゃん！ー！」

ヒトカゲはピカチュウになりきりながらアツミを探した。それについていくピカチュウ。

そして、二人は公園でアツミを見つけた。

ピカチュウ（ヒト）「あつ！ー！アツミちゃん！ー！」

アツミ「え？あ……。昨日の……。」

ピカチュウ（ヒト）「うん。ピカチュウだよ。今日は友達を連れてきたんだ。ヒトカゲくんだよ。」

ヒトカゲ（ピカ）「はじめまして！ー！オレはヒトカゲ！ー！よろしく

な！！」

アツミ「うん、よろしくね。」

アツミはかわいく返事をする。

ピカチュウ（ヒト）（くそあ……。やっぱりかわいいな……。）

アツミの返事にヒトカゲは照れる。

アツミ「それで、今日はどうしたの？」

ピカチュウ（ヒト）「あ、うん。今日はヒトカゲくんがどうしてもアツミちゃんと友達になりたくてきたんだ。」

ヒトカゲ（ピカ）「ああ！！なんかアツミちゃんみたいな人とはポケモン気が合いそうで……。熱血系とか嫌いかな？」

アツミ「ううん。嫌いじゃないよ。むしろ好き！！」

ピカチュウ（ヒト）（良かった……。熱血系が好きなんだ……。まあ同じ炎タイプだからな。）

ヒトカゲはほつとした。その後、三人はしばらく公園で遊ぶことになった。

——何時間かたち、夕方。

アツミ「ありがとう！！たくさん遊んでくれて。楽しかったよ。」

ピカチュウ（ヒト）「どういたしまして。ボクも楽しかったよ。」

ヒトカゲ（ピカ）「ありがとな！！オレなんかと友達になってくれて…。」

アツミ「ううん。大丈夫だよ。ワタシは悪い人以外はみんな友達になれるから♪じゃあバイバイ♪」

ヒトカゲ・ピカチュウ「じゃあね〜！！」

ヒトカゲ（ピカ）「うまくいったみたいだね。」

ピカチュウ（ヒト）「ああ。アツミと両思いになるためにも早く元に戻らなくちゃな。」

ヒトカゲ（ピカ）「そうだね。ボクも早く自分の家で暮らしたいよ。」

ピカチュウ（ヒト）「オレも。いつもの日常に戻れるといいな…。」

そう話しながら二人は帰るのだった。

ピカチュウの作戦（後書き）

あゝあ。ネタ切れた。

もしかしたらこの小説、二、三十話で終わらすかもしれない…。

ヒトカゲ（ピカ）「たったの三十話!？」

ピカチュウ（ヒト）「それだけ作者の文章力がないって事だな。」

グサツ
↑

あ、あとこの小説の挿絵を大募集中です!! 詳しくは僕の活動報告にて!!

ピカチュウ（ヒト）「来ないと思うけどな。」

グサツグサツ
↑↑

でも、もしも僕のこの小説が三十話で終わったとしても、次の小説のアイデアはもう出来上がってますから!! 期待しないで待っててくださいね!!

ピカチュウ（ヒト）「期待しないのかよ（汗）」

では!!

誘拐〜そして、最終章へ〜（前書き）

はい。またも2週間あいてしまいましたね。

そして、お詫びです。

13話という短い話数でしたが、このたび最終章へのカウントダウンが始まりました。

長編ながら短編っぽくなってしまいましたすみませんでしたm（　　）m

でも、みなさん！！残念がることはないですよ！！

続編はもう第1話を非公開投稿してあります！！

見たいという方は、メッセージでこっそりとURLを教えます。

今回のお話は約800文字と少なくなっていましたでしたが、少しシリアスめで内容も最終章に近づかせるためにギュギュッと凝縮してあると思います。（正直、自信はありません。）

では、11話、スタートです！！

誘拐―そして、最終章へ―

ヒトカゲとピカチュウが入れ替わって1ヶ月がたった。

アツミとの仲は相変わらず「友達」のままだが、けんかはせず、仲良くやっている。

しかし、3人が仲良くしてる姿をこっそり見ているポケモンがいた。

???「あいつら…。新しい友達が出来たのか…。しかも♀…。ますます嫉妬しちゃうぜ…。」

――その約3日後、中身ヒトカゲのピカチュウから手紙が来た。

ピカチュウ（ヒト）「な、何だこれ!!」

その手紙にはこんな内容が書かれていた。

――おまえの友達は預かった。

返して欲しければ立ち入り禁止と書かれている森へ来い。
オレとバトルしたら返してやる。

ヒトカゲは走りながら、ピカチュウ、そしてフシギダネとゼニガメにも伝えた。

ヒトカゲ（ピカ）「ええっ!?!誘拐!?!」

ゼニガメ（フシ）「確かアツミちゃんって子、一度ワタシたちの家に連れてきてくれた子よね?」

フシギダネ（ゼニ）「誰だ…！誘拐したやつは…！」

ピカチュウ（ヒト）「それが…。名前が書いてないんだよ…。」

ヒトカゲ（ピカ）「でも…。誰であろうと許さないよ…！こんなことするなんて…！」

ピカチュウ（ヒト）「ああ…！それで場所なんだけど…。“立入禁止の森へ来い”ってかかれてたんだ。」

ヒトカゲ（ピカ）「そこってボクたちが入れ替わった森だよね…？」

ゼニガメ（フシ）「もしかしたらあの誘拐犯、偶然ながらチャンスを与えてくれたわね。」

フシギダネ（ゼニ）「とにかく、あの森へ行こう…！」

全員「おーーーーっ…！」

4人は森へ急いだ。

ピカチュウ（ヒト）「着いた…。」

ヒトカゲ（ピカ）「あっ…！あそこに影が見えるよ…！」

ピカチュウ（ヒト）「ねえ…！アツミちゃんを帰してよ…！」

ヒトカゲはピカチュウになりきりながら話した。そうすると、影は振り返った。

???「よう。久しぶりだな。」

ヒトカゲ（ピカ）「!!」

ピカチュウ（ヒト）「お、オマエはっ…!!」

続く。

次回、最終章前編!!

誘拐〜そして、最終章へ〜（後書き）

はい。ここまでです。

おそらく読者の皆さんはうすうす気づいてるでしょうか？
あの誘拐犯の正体を…。

はい。事実上本編初登場のあの方です。
今回は、最終章前編です！！

期待は…。おそらくしない方がいいかとwwww

最後の戦いと、告白〜最終章前編〜（前書き）

はい。自分でも恐ろしくアイデアが浮かんで来ます…！

スランプくんから見事、脱出！！イエーイ！！
しかし、またやってくる可能性が…！

スランプがまた来る前に完結させないと…！！

今回は誘拐犯の正体と、奇跡と、告白。

最終章前編ということで、1000文字以上のクオリティに仕上げました。

では、12話、スタートです…！

最後の戦いと、告白／最終章前編

???「久しぶりだな。」

ヒトカゲ（ピカ）「!！」

ピカチュウ（ヒト）「お、オマエはっ…！ナエトル!!」

ナエトル「元気そうだな。ヒトカゲ、ピカチュウ。ゼニガメとフシギダネもいるのか…。」

ピカチュウ（ヒト）「アツミちゃんを返せ!!」

ナエトル「おっと、そうはいかないなあ…。オレとバトルでもしなくちやなあ…。」

そのとき、ピカチュウの「アレ」が発動した。

ヒトカゲ（ピカ）「よう。久しぶりだな、ナエトル…。ボ…。いやオレはオマエを今すぐ始末してやる!!」

二重人格が発動したピカチュウだが、ヒトカゲと口調が同じなため、ばれてはいない。

ナエトル「やってみろ!! ならば4人で向かってもいいんだぞ。」

全員「えっ!？」

ナエトル「オレはピカチュウに負けてから修行して、強くなったん

だ。だから、誰にも負けねえ!!」

ヒトカゲ（ピカ）「よぉーし!!じゃあこっちから行かせてもらおうぜ!!火の粉!!」

ナエトル「守る!!」

ナエトルはとつさにシールドを張り、守った。

ピカチュウ（ヒト）「電光石火!!」

ナエトル「うおっ!!」

少しは効いたようだ。

ナエトル「なかなかやるじゃねえか…。ならばこっちも反撃だ!!日本晴れ!!」

ゼニガメ（フシ）「うわっ!!まぶしい!!」

ナエトル「そしてソーラービーム!!」

ナエトルの今までにない強力なソーラービームが4人を襲った。

4人「うわああああ!!」

4人はその衝撃でそのまま転げ落ちた。

ナエトル「はあはあ…。あいつら、どうなったんだ?」

そうつぶやいた瞬間、4人の体が突如光った。

ナエトル「うわぁ……！何だ？」

そして、おさまった。

ナエトル「……？さっきのはいったい……。」

しばらくして、4人は同時に目を覚ました。

ヒトカゲ「う、うん……。」

ピカチュウ「うん……。」

ゼニガメ「何……だったんだ……？」

フシギダネ「今のはいったい……？」

そして、ある事に気づいた。

ヒトカゲ「ん……？ピカチュウ……？」

ピカチュウ「あれ……？ヒトカゲ……くん……？」

フシギダネ「ゼニガメくん……？」

ゼニガメ「フシギダネ……だよな……。」

4人「まさか……！」

ヒトカゲ「お、オレだ！！ヒトカゲの体だ！！元に戻ったんだ！！」

ピカチュウ「ボクだ！！ボクの…ピカチュウの体に戻ってる！！」

フシギダネ「ワタシ…。フシギダネだ！！」

ゼニガメ「オレだ！！ゼニガメだ！！」

4人「やった~~~~~~~~！！元に戻った~~~~！！」

ナエトル「????元に戻った????」

ヒトカゲ「あ、まだいたのか…。」

ピカチュウ「いい加減倒れて欲しいね…」

ゼニガメ「元に戻ったことだし…。」

フシギダネ「やりますか」

→ 注：黒いオーラが出ています。

ヒトカゲ「火炎放射！！」

ピカチュウ「雷！！」

ゼニガメ「ハイドロポンプ！！」

フシギダネ「ソーラービーム！！」

→ まだ日本晴れです。

ナエトル「ぎゃああああ!!」

——あっけなくやられたその後。

ナエトル「負けた…。仕方ない。アツミは解放してやる。」

ナエトルはテープで口をふさがれていて、縄で縛られていたアツミを解放した。

アツミ「ぷはっ!!あ、皆さん…。ありがとうございます!!」

ピカチュウ「どういたしまして。あ、後ヒトカゲくんが話したいことがあるそうです。」

ヒトカゲ「ば、馬鹿!!」

ゼニガメ「おっ!!これは見もの」

フシギダネ「楽しみですね」

ヒトカゲ「おまえら…。」

ピカチュウ「さっ、早く早く!!」

ヒトカゲ「わ…、わかったよ…。あ、あんなアツミ…。オレは…。」

アツミ「へ?」

ヒトカゲ「オレは……。オマエのことが……。好きだっ！！」

アツミ「えっ！？」

最後の戦いと、告白（最終章前編）（後書き）

はい。ここまで！！

無事4人は元に戻れましたね！！

ピカチュウ「良かった…！やっと元に戻れたよ…！」

フシギダネ「次はヒトカゲくんの告白ね。楽しみ♪」

ヒトカゲ「／／／／」

ゼニガメ「恥ずかしすぎて固まってるぞ。」

ピカチュウ「はははは…。」

ちなみに誘拐犯の正体、ナエトル。皆さんはもちろん覚えてますよね？

彼は本編では写真で登場してますが、実物では初登場となります。

最終的にはやられましたけどね（笑）

ピカチュウ「まあ無事に倒せてよかったよ。」

ヒトカゲ「／／／／」↑まだ固まってる。

えゝでは、次回が最終回となります！！

この2ヶ月間、書いてて良かったと思った日が何度あったことか…！

徐々にお気に入り登録が増えて嬉しかったです!!

感想も更新するたびに増えて、すごくドキドキ&感動でしたよ!!

みなさん。今まd――

ピカチュウ「それは最終回で言おうね!?!」

は、はい…。

次回、最終回!!

乞うご期待!!

喜びと、試練〜最終章後編〜ピカヒト、ついに完結!!（前書き）

はい。ついに完結となりました。

果たしてアツミはヒトカゲからOKをもらうことができるのでしょうか!?

そして、今回は最終回ということで、ヒトカゲたちの名前も明らかになります!!

そちらにも注目してみてくださいね!!

どうして入れ替わったのかも明かしますよ!!

では13話、そしてついに「ピカヒト」完結!!

最終回、スタートです!!

喜びと、試練〜最終章後編〜ピカヒト、ついに完結!!

ヒトカゲ「オマエのことが…好きだった!!」

アツミ「えっ!?!」

ヒトカゲがアツミに告白した後、しばらく沈黙が続いた。

そして、アツミは口を開いた。

アツミ「は、はい!!喜んで!!」

ヒトカゲ「え…。や、や、やった〜〜〜〜〜!!」

そして、3人の拍手が鳴り響いた。

ピカチュウ「おめでとうヒトカゲくん!!」

フシギダネ「おめでとう!!」

ゼニガメ「良かったな!!」

ヒトカゲ「お、おまえら…!サンキューな〜〜〜!!」

アツミ「ワタシ、ヒトカゲくんと幸せになりま〜〜す!!」

ヒトカゲ「あ、ヒトカゲじゃなくていいよ。オレには本名があるんだ。」

ピカチュウ「そういえばボクたち、親友だったのに、ずっと種族名で呼んでたね。」

ゼニガメ「いまさら!?!」

フシギダネ「まあいいじゃないですか。」

ヒトカゲ「オレの本当の名前は――。 “カゲト” っていうんだ。」

ピカチュウ「じゃボクも教えるね。ボクは “コウキ” 。」

ゼニガメ「オレは “カンタ” 。」

フシギダネ「ワタシは “ハナ” です。」

アツミ「うん……みんなよろしく!!--」

4人「よろしく!!--」

――そして、1ヶ月後。

フシギダネの家。

カゲト「よっ!! 遊びに来たぜ!!!--」

アツミ「お邪魔します。」

ハナ「あ!!--いらっしやい!!--あがってあがって~。」

カンタ「よう。」

カゲト「あ、カンタも来てたのか。」

カンタ「来てたのかとは何だっ!!」

カゲト「ごめんごめん。」

アツミ「ふふ。楽しそうですね。ね？カゲトっ」

ハナ「なっ…！」

カンタ「呼び捨て！？」

カゲト「恋人だから呼び捨てに決まってるだろ!!（正直恥ずかしいけどな…）」

コウキ「お〜い!!」

カゲト「あ、コウキ!!」

コウキ「ごめんね。待った？」

ハナ「全然待ってないわよ。あがって。」

コウキ「お邪魔します。」

所変わって、フシギダネの家のテーブル。クッキーとジュースが用意されている。

ハナ「では、すべてが元に戻り、そしてカゲトくんとアツミちゃんのカップル成立を祝ってかんぱーい!!」

全員「かんぱーい!!」

コウキはクッキーを食べながらこんな質問を小声で話してきた。

コウキ（ねえ、どうしてボクたちは入れ替わっちゃったのかな？）

カゲト（オレは多分…。“試練”だと思うな。）

コウキ（試練？）

カゲト（多分いたずらの神様はオレたちがどのくらい仲がいいか試してたんだと思う。でもオレたちの友情は本物だったし、入れ替わってなかったらオレとアツミも結ばれてなかったと思う。）

コウキ（なるほど…。ボク、カゲトくんに入れ替わってカゲトくんの気持ち、もつとわかった気がする。カゲトくん。大好きだよ。これからもよろしくね。ずっと一緒だよ。）

カゲト（お、おう…。よろしくな!!）

カゲトは恥ずかしそうにしながら答えた。

しかし、そんないいシーンをぶち壊すことが起きた。
インターホンがなった。

ピンポン。

三馬鹿「フシギダネちゃん！遊びに来たよ！！！」

カンタ「あ…。」

ハナ「空気を読まない三馬鹿が来ましたね…。」

カゲト（せっかくのいい雰囲気つぶち壊した！！）

コウキ（お、同じく…。）

アツミ「三馬鹿って…？」

ハナ「後で紹介します。」

ヒー「おお。クッキーだ！！」

チー「ワタシたちのために用意してくれたのね！？」

カンタ「いや、違うって！！」

ミー「う〜ん…。おいしそう…。」

カンタ「よだれをたらすな！！」

アツミ「ふふつ。にぎやかになりそうね。カゲト」

カゲト「あ、ああ…。」

コウキ「あははは…。」

ここはポケモンだけの世界。
すべてが元に戻った今、カゲト、コウキたちは現在平和に暮らして
いる…。

完。

喜びと、試練〜最終章後編〜ピカヒト、ついに完結！！（後書き）

はい、どうでしたか？

たった13話だけでしたが、みなさん今まで応援ありがとうございました！！

こんな駄作者と駄作小説を応援してくれる人がいるんだな〜と改めて実感しました！！

これに感想を書いてくれたすべての皆さん！！
これにお気に入り登録をしてくれたすべての皆さんに！！

感謝です！！

本っ当に！！ありがとうございます！！

あれ？感動して涙が…。（泣）

あ、みなさん！！この後は続編です！！
涙を流してる人はいったん拭いてください！！

続編も応援するよ！！という方、ぜひ感想を書いてください！！

お待ちしております！！

ちなみに続編は8日（つまり今日）に公開する予定です！！

では、続編でまた会いましょう！！

おれは！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5564v/>

ピカチュウがヒトカゲでヒトカゲがピカチュウ！？

2011年11月13日19時53分発行